

# まどろみの海

写真・文

津島修三

〈秋田市在住〉

小説家太宰治は津軽の生まれなので、作品にはしばしば津軽の地名や話題が登場する。秋田にはあまり縁がなかったみたいで、作品で秋田に触れているものはほとんどないが、「海」という掌編の中に次のような記述がある。

私たちは甲府から、津軽の生家に向って出発した。三昼夜かかって、やっと秋田県の東能代までたどりつき、そこから五能線に乗り換えて、少しほつとした。

戦況も絶望的な昭和二十年七月、太宰一家の三鷹の家は空襲に遭い、妻の実家のある甲府に逃れたが、そこもすぐに敵機の来

襲で焼け出され、あとはもう津軽の生家を頼るしかないという悲愴な旅だ。

「たずねびと」はこの旅の前半を描いた作品だ。甲府を出て仙台にたどり着くあたりまでの様子が描かれている。その日のうちに乗り継ぐつもりだった上野駅では予定の列車に乗れず、その夜は改札の横でころ寝。上野を出てからも満員の列車を何度も乗り換え、真夏の熱風、泣きやまぬ乳飲み子。疲労困ぱいの旅だった。太宰の妻の美知子さんはほとんど乳がはず、むずかり出した乳飲み子をなだめるすべもない。それを見かねた同乗の女性が、貸してみなさいと赤ん坊を引き寄せ、自分の乳房を含ませる。赤ん坊はほどなく泣きやむ…。

太宰の生家は五所川原から津軽鉄道に乗り換えていく金木という町だから、東能代ではなく弘前を経由するのが順当なのだが、いつ死ぬかも分からない戦況下で、せめて生きているうちに子供たちに海を見せてやりたいというのが東能代経由の理由と太宰は述べている。

五能線の乗客が車窓に海を眺められるのは、東八森駅を過ぎたあたり。それまで平坦な田園地帯を走ってきた線路は、東八森の先で、海の際まで迫る白神山地の山塊に押し寄せられるように、波打ち際のざりざりを走るのだ。

念願通り子供に海を見せることができて一人はしゃぐ太宰。数え五歳の長女は海が分からず、「川だわねえ、お母さん」などと言っている。

「ああ、川。」妻は半分眠りながら答える。

家族の反応があまりに予想外で、太宰はすつかりしよげ返る。

太宰の没後、「回想の太宰治」を著した美知子さんは、妻の側からこの時の旅の様子も述懐している。深浦の宿で酒にありつくことが東能代経由の本当の魂胆と見抜いていたこと、翌朝の深浦での汽車時間までのあいだの磯遊びがこの旅で一番心が晴れやかだったこと、夫がそういう家族のだんらんを書かないで「海」のような少しひねたことばかり書くのを恨みがましく思ったこと、などなど。

亭主と女房は、同じ時間を過ごし、いても、えてして違う感懐に浸っているものなのかもしれない。自戒自戒…。



太宰一家の視界にたそがれどきの鈍色の日本海が飛び込んでくる。2晩も駅の構内でころ寝した苦行の旅も、3日目の夜を迎えようとしていた。ここは東八森駅と八森駅のちょうど中間あたり。国道沿いに『海』の文学碑でも欲しいところだ